

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32614

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870724

研究課題名(和文) 民主化と宗教の関係に関する考察：1970年代ポーランドを事例として

研究課題名(英文) The relationship between the Catholic Church and the State in Poland in the 1970s

## 研究代表者

加藤 久子 (Kato, Hisako)

國學院大學・研究開発推進機構・研究員

研究者番号：10646285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：ポーランドを事例とし、従来の民主化研究の中で十分に検討されてこなかった、国家(党)、社会と教会の関係が漸進的に変化する過程に着目することで、民主化プロセスにおける宗教の機能について再検討した。

主要な成果は以下の2点である。

(1) 1978年の教皇ヨハネ・パウロ2世の選出から翌79年の初めての祖国訪問に至るまでの政教間での交渉プロセスを解明した単著を出版した。(2) 公立学校における宗教教育が禁じられる中で、公教育以外のあらゆる場所へと宗教教育の場が拡散されて行くプロセスを解明し、論文として発表した。

研究成果の概要(英文)：A lot of research shows that the Catholic Church has struggled against the Communist Party and played an essential role in the process of democratization under the Socialist regime of Poland. Nevertheless, I focus on the following Church functions: negotiations; striving for consensus, and trying to reach compromise with the Party.

The main achievement of my research during this period is published under the title, "Homilies of Pope John Paul II: His First Pilgrimage to the Homeland in 1979", which examined the process of diplomatic negotiation between the Polish episcopal conference and the Party in order to realize the pilgrimage, and its preparation of all programs in cooperation with the central and local government. Finally, I concluded that this historical event created a channel between the bishops and higher officials, priests and local administrators, the archdiocese of Warsaw and the provincial counterparts, clergymen and ordinary people, who are almost secularized.

研究分野：社会学

キーワード：政教関係 民主化 社会変動 カトリック ポーランド 宗教教育 ノンフォーマル教育 歴史認識

## 1. 研究開始当初の背景

1989年における社会主義政権の崩壊にポーランドのカトリック教会が強い影響を与えたことは、1990年代の研究において頻繁に言及されてきた。特に、宗教社会学の分野では、宗教復興論や公共宗教論の文脈で、ポーランドのカトリック教会に世界的な関心が集まり、学界における中心的な主題の一つとなった。また、比較政治学においても、南欧や南米との比較から生じた「民主化の第三の波」に関わる研究において、ブラジルなどとともに、ポーランドのカトリック教会は民主化を推進したファクターとして扱われてきた。これらの研究で、党と教会の関係は常に「対立か宥和か」という両極端な視点から語られる傾向にあり、多くの場合、カトリック教会は宗教指導者のリーダーシップなどに着目され、反体制運動の文脈で取り上げられる例が目立っている。

しかし、M.フーコー等に依拠すれば、「市民社会」は、人々に対する「統治の手段・技術」であると同時に、「国家権力に圧力を及ぼす手段」と考えられる。仮に教会を市民社会の文脈において語るならば、教会の持つ、このような両義性を認識する必要がある。また、これらの2つの性質が教会の内に共存する有りように目を向ける必要がある。一般の信徒は、カトリック信徒として、党のイデオロギーに反するイデオロギーを振りかざし、激しく抵抗し続けていたわけではない。

党が忠誠を求める諸個人は、教会が「信徒」と呼ぶ諸個人でもあり、さらに、後には「反体制運動」が同志として連帯を呼び掛けた諸個人でもあるという点が、社会主義ポーランドにおける社会の在りようを決定付けた。ポーランドの社会においてカトリシズムは、明確に認識された教義ではなく、日々の生活に根ざし、ある部分ではすでに身体化されていたが故に、党にとっての難敵となった。この点が、市民社会の文脈において教会について考える上で、重要な論点となる。

したがって、本研究の特徴は、(1)党と教会の間での激しい対立よりも、妥協や合意形成のプロセスを解き明かす点、(2)教会と社会(市民社会)を一体のものとは捉えず、両者の関係性を分析の対象とする点、(3)教会の中での階層性や多様性に着目する点、となる。

## 2. 研究の目的

本研究は、「民主化の第三の波」と呼ばれる南欧・南米・東欧における体制移行と宗教(特にカトリック教会)の関係を明らかにすることを目的とする。ポーランドを事例とし、従来の民主化研究の中で十分に検討されてこなかった、国家(党)、社会と教会の関係が漸進的に変化する過程に着目することで、民主化プロセスにおける宗教の機能につい

て再検討する。

政治と宗教が深く関連し、宗教が社会に強い影響を与えてきたカトリック地域の体制移行のダイナミクスを解明することで、最終的に、非ヨーロッパ地域(イスラム教・ヒンドゥ教地域)における政治や社会の変動を理解する手がかりを得たい。宗教とともに、または宗教によって民主化が進行したという意味において、ポーランドの事例は、従来、西欧(プロテスタント)諸国によって提示されて来た「民主主義」や「民主化」に対する、オルタナティブなデモクラシーの概念と方法を示唆するものと考えている。

## 3. 研究の方法

本研究の手法は、(1)一次史料に基づく分析、(2)政教関係に関する社会学・宗教学を中心とする理論的検討、(3)当該時期の歴史に関する「語り」を分析する歴史社会学の調査、の3つの柱から成る。

(1) ポーランド国立公文書館(現代史分館、クラクフ分館)に保存されている党、行政の文書、教会のアーカイブに保存されている教会行政に関する文書や書簡、各種行事の際に読み上げられた説教、県立図書館や大学図書館が所蔵する新聞などのメディア資料を収集し、分析を行う。

また、新聞・雑誌等については、県立図書館などがデジタル化して公開しているオンライン・アーカイブも活用する。

(2) 宗教復興論や公共宗教論の枠組みで政教関係について書かれた文献を批判的に検討しつつ、(1)の事例をどのように理論的枠組みの中に配置しうるかについて考察する。そのほか、ヨーロッパにおける他のカトリック国に関する文献、また、近代化や世俗化について取り上げた文献について収集し、参照する。

また、現地調査の際には、大学図書館等において、ポーランドの社会主義期におけるカトリック教会を研究対象とした最新の研究動向(学術論文、新刊書籍、博士論文)を調査する。

(3) 同時代のマスメディアや、国家規模での記念式典等の際に現れる、社会主義期の「民主化(運動)」を振り返るレトリックを分析し、当時の記憶がいかに資源化されているかについて考察する。これについては、最新刊の新聞雑誌等を資料として用い、主に政治家の歴史認識に関わる発言、ならびに歴史学、社会学を中心とする研究者の発言に着目する。

また、調査期間中、ポーランド人の自己認識(あるいはナショナリズム)を反映したものとして、他宗教や他民族に対する認識の変容が浮き彫りとなってきたため、あわせて分

析対象にすることとした。

#### 4. 研究成果

(1) 調査内容：2014年2-3月、2015年3月にそれぞれ3週間の現地調査を行った。国立公文書館（現代史史料館、クラクフ現代史分館）およびカトリックのワルシャワ大司教区およびクラクフ大司教区のアーカイヴにおいて、1970年代を中心とした政教関係に関する一次資料を収集した。

ワルシャワ大学図書館、マウオポルスカ県立図書館では、1970年代を中心にカトリック教会、パチカンなどを扱った新聞、雑誌記事を収集した。また、政教関係を中心に、ポーランドの現代史の研究動向に関する最新の論文を入手した。

これらの調査による直接的な成果としては、以下の2点が挙げられる。

教皇ヨハネ・パウロ2世の即位（1978年）から初めての祖国ポーランド訪問（1979年）に至るプロセスを事例に、社会主義期ポーランドの党や政府、教会ヒエラルキー、ポーランド社会、諸外国との外交関係に与えた影響について分析を行った。2014年2~3月に収集した資料を分析し、同期間における党・政府と教会の間で交わされた駆け引き、また、訪問が決定してからの準備のための協働、これらのことがポーランド社会に与えた影響についての考察を、『教皇ヨハネ・パウロ2世のことは 1979年の祖国巡礼』としてまとめ、ブックレット形式の書籍（単著）として刊行した。

上記に関連し、作業中に発掘したアウシュヴィッツの聖者・コルベ神父に関する史料を整理しつつ、ポーランド・ナショナリズムとコルベ神父への崇敬の関連（同国人である聖人への崇敬）という観点から、史料の分析を行った。

同時に、コルベ神父が日本滞在期に発行していた雑誌の内容から、第二次世界大戦前夜の日本人外交官とカトリック聖職者の交友関係について、論文「河合博之駐ポーランド特命全権公使の改宗と客死（1933年）『無原罪の聖母の騎士』誌より」にまとめた。本稿においては、当時の外交官夫人のなかに、カトリックのミッションスクール出身者が多数含まれており、その影響により外交官のなかにもキリスト教に改宗する者が断続的に現れていることを示唆した。戦前の日本の知的エリート層へのキリスト教の浸透・影響については、芸術家・学者、政治家などを中心に言及されているが、官界（外交官）への影響という点については、見えにくく、調査されてきていない点と考えられるため、発展的な研究課題となり得ることを提案した。

(2) 20世紀欧州における宗教状況の分析枠

組みに関する文献研究を行った。宗教学分野における政教関係史、社会学分野における公共宗教論、市民社会論を中心に文献を収集し、理論的な整理を行った。

これらの文献研究による直接的な成果としては、以下の2点が挙げられる。

ポーランドのカトリック教会の事例が、市民宗教論、あるいはナショナリズムとカトリシズムの融合という文脈において、どのように位置づけられるかについてまとめ、「宗教と社会」学会において、「社会主義期ポーランドにおけるカトリック教育」と題する口頭で報告を行った。その際、具体的な事例として、(1)の調査により得られたポーランドの公教育におけるカトリック要理教育の変遷についての資料を用いた。

報告に際し得たコメントから、欧州の他のカトリック諸国との比較の中で、考察をさらに深めることが必要であることを強く認識するに至った。特にフランスにおける「ライシテ（世俗主義）」の例と、ポーランドにおけるカトリック教会がナショナリズムと完全に融合し、社会の公的な場に完全に浸透しているように見える事例を、「欧州のカトリック国における政教関係」の事例として、どのように関連付け、配置できるのかといった問題関心を持ったことから、フランスの政教関係史に関する基礎的調査を本研究課題の後半期の課題に追加した。

上記の口頭報告およびその後の理論的研究の成果を含むものとして、論文「社会主義政権下での宗教実践 スターリン期ポーランドの新興工業都市の暮らし」を執筆した（中野智世・尾崎修治・渡邊千秋・前田更子編、2016『近代ヨーロッパとキリスト教 カトリシズムの宗教社会史』に所収される予定）。社会主義政権による宗教弾圧が最も激しく行われてきた「スターリン期」を事例として取り上げ、その宗教政策を「世俗主義」の拡大プロセスであると措定した上で、その効果や社会への浸透の仕方、また、その中で生じたせめぎ合いなどについて論じた。論集にはフランス、イタリア、スペイン等、欧州各国の「カトリック国」の近現代史を研究対象とする研究者が参加しているため、本研究課題について、より広い文脈で理解する上でも参考になる点が多々あったと考えている。

(3) 当初、同時代のマスメディアや国家規模での記念式典等で用いられる、社会主義期の「民主化（運動）」を説明する際のレトリックを分析対象とする予定であったが、その後、クリミア半島のロシアへの併合や「イスラム国（IS）」の勢力伸長にともなう国際環境の激変により、本研究課題申請時に非常に多くみられていた「民主化」にまつわる過去の意義づけや、それを根拠とした「民主化（民主主義）」の欧州周辺地域（旧ソ連圏や北ア

フリカなど)への輸出といった言説が影をひそめるようになった。

一方で、ポーランド国内では、他の旧東欧諸国同様、旧ソ連の歴史を踏まえたロシア観や、宗教的「他者」としてのイスラム教徒やユダヤ教徒をとりあげた言説が非常に増えて行ったことから、本研究課題にとっても有益な分析材料になると判断した。したがって分析対象を変更し、調査・研究を実施することとした。

これらの分析による直接的な成果としては以下のものが挙げられる。

戦後ポーランドにおけるアウシュヴィッツ強制収容所に関する政治家の発言や第二次世界大戦に関する歴史観について、ポーランド・ナショナリズムとカトリシズムの関係から分析し、論文「ポーランド人にとっての<アウシュヴィッツ> アウシュヴィッツ=ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所」を執筆した。前半では、アウシュヴィッツ強制収容所跡地をポーランド人がどのように保存し、博物館展示を行ってきたかという点から分析を行い、後半では、アウシュヴィッツ強制収容所の解放記念日における国家元首のスピーチの内容や世論調査における「他宗教」に対する認識の変容等を取り上げた。

また、本テーマについては、ダークツーリズムの対象とされる「第二次世界大戦にまつわる戦跡観光」の1例として、アウシュヴィッツ強制収容所博物館を取り上げ、そこで生まれるイデオロギー対立や宗教的対立に焦点を当てた分析をおこなった。内容については、ロシア・東欧学会、慶應人類学研究会・三田哲学会、仙人の会の3つの学会、研究会において口頭にて報告した。また、本事例については、慶應義塾大学におけるオムニバス授業において紹介し、講義録「負の記憶をめぐる旅<アウシュヴィッツ>：ポーランド」に内容をまとめた。

(4)その他、本研究課題から派生した成果(主にアウトリーチ活動)として以下のようなものがある。

宗教学の初学者向けの教科書の1部として、「観光と宗教」の項目を執筆した。近代において急激に発展した観光という現象に焦点を当てることで、モダニズムと宗教の関係について分析し得ることを、事例を交えながら平易に解説した。近代化と宗教の関係について理論的な整理をする上で、(2)の研究成果にも関連する示唆を得た。

教皇ベネディクト 16 世の退位と教皇フランシスコの即位という出来事が発生したことから、一般紙、民間シンクタンク機関誌などを中心に、背景・経緯の分析や政治的意義

に関する論説を「教皇フランシスコは改革者か」ほか、複数執筆した。

これについては、本研究課題である(1)とも深く関連しており、教皇の即位というものが、政治・社会・外交面でいかなる変化をもたらすか(あるいはもたらさないか)ということ进行分析したことで、教皇ヨハネ・パウロ2世の即位が、同時代(1970年代)のポーランド社会に与えた影響についても、より深く考察することができた。

アウトリーチ活動として、過激派組織「イスラム国(IS)」の活動に関連して、欧州で生じているさまざまな宗教的な現象(若者の過激化対策、移民・難民の増加と極右勢力の伸長、反ユダヤ主義的現象、『シャルリ・エブド』事件、フランスにおける同時多発テロなど)について、民間シンクタンク機関誌や一般向け雑誌等に解説記事を執筆した。

欧州におけるアクチュアルな宗教現象の中で、上記(2)(3)の考察を進めることができた点、また欧州の他のカトリック諸国との比較の視点を得たという点でも意義深い作業となった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

加藤久子、ポーランド人にとっての<アウシュヴィッツ> アウシュヴィッツ=ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所、季刊民族学、査読無、153号、2015、18-29

加藤久子、河合博之駐ポーランド特命全権公使の改宗と客死(1933年) 『無原罪の聖母の騎士』誌より、日本文化研究所年報、査読無、第7号、2014、58-66  
<http://www.kokugakuin.ac.jp/oard/nenpo7.html>

加藤久子、教皇フランシスコは改革者か、宗教と現代がわかる 2014、査読無、2015、112-115

[学会発表](計4件)

加藤久子、他者の歴史を展示するということ ポーランドにおけるホロコースト・サイトの保存、展示、仙人の会、11月例会、2015年11月21日、於・明星大学(東京都日野市)

加藤久子、社会主義期ポーランドにおけるカトリック教育、「宗教と社会」学会、第23回、2015年6月13日、於・東京大学(東京都文京区)

加藤久子、ポーランド人にとってのアウシ

ユヴィッツ強制収容所の記憶～歴史叙述や記憶に関する社会学的検討、ロシア・東欧学会、第43回、2014年10月5日、於・岡山大学（岡山県岡山市）

加藤久子、＜アウシュヴィッツ＞とともに暮らすということ 負の文化遺産と地元住民、慶応義塾大学人類学研究会（三田哲学会共催）、2013年7月9日、慶応義塾大学（東京都港区）

〔図書〕（計4件）

中野智世・尾崎修治・渡邊千秋・前田更子編、勁草書房、近代ヨーロッパとキリスト教カトリシズムの宗教社会史、2016、計17頁分担（加藤久子、社会主義政権下での宗教実践 スターリン期ポーランドの新興工業都市の暮らし）

山本敏夫文学部基金講座、慶應義塾大学文学部、現代社会と宗教、2016、38-40を分担（加藤久子、負の記憶をめぐる旅＜アウシュヴィッツ＞：ポーランド）

加藤久子、東洋書店、教皇ヨハネ・パウロ2世のことば 1979年の祖国巡礼、2014年、79

櫻井義秀・平藤喜久子編、ミネルヴァ書房、よくわかる宗教学、2015、194-195を分担、（加藤久子、観光と宗教）

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

加藤 久子 (KATO, Hisako)

國學院大學・研究開発推進機構・研究員

研究者番号：10646285